

高校生の職業観形成に対する教育・生活活動の作用に関する比較研究 — 日・独・韓3か国における高校3年生の生活時間の事例調査結果から —

寺田 盛紀* Lee Mhung-Hun** Krähe Harald***

1. はじめに

本研究は、2008年の予備調査研究(寺田2009a)以来継続している筆者等の「高校生の職業観形成に関する比較教育文化的研究」に関して、2009年に行った第1回調査結果の分析(寺田2009b, 2012)を踏まえた2011年の第2回調査の結果(寺田2013a)及び2回の調査結果の間に見られる縦断分析の結果(2013b)で指摘した職業観形成における高校生の生活・教育的活動の影響を、彼・彼女らの生活レベルからケース・スタディ的に考察を加えようとするものである。

2. 比較縦断アンケート調査から抽出された若干の論点

まず、前稿(2013b, 131-132)において、2009年と2011年のパネル調査結果(表1参照)の分析から明らかにしえたた主なことがらを摘記する。

職業観自体の反復効果：アメリカの第1尺度(自己実現・生活享受志向)、ドイツと中国の第2尺度(社会・奉仕志向)などの反復主効果において有意な低下傾向が見られた。他方、インドネシアの第1尺度、第4尺度(リーダー・富有家志向)、日本の第1尺度、韓国の第3尺度(経済・安定志向)の反復主効果では有意に向上している。

効果的出来事の有無の効果：6か国全体では、普通教科での学習(第1尺度と第2尺度)、職業高校での専門学習(第2から第4尺度)、アメリカの普通教科での学習(第3尺度)、テレビ・映画(第1と第2尺度)、ドイツの校外体験学習・企業実習における3尺度、インドネシアの労働行政の就職指導における第3と第4尺度、日本の学校の就職指導における第3尺度、韓国の職業高校での専門学習における第2と3尺度、中国のアルバイトにおける第2と第4尺度などの主効果において、有意なプラス効果が見られる。

交互作用：交互作用においては、有意な低下傾向が目立つけれども、インドネシアの職業高校での専門学習における第4尺度、韓国のボランティア活動にお

ける第3尺度では、有意な上昇傾向が見られた。

このように、とく効果的な生活・学習活動という点で、国、各因子ごとにその現れは異なるが、普通教科や職業教科の学習、校外・企業体験学習、就職指導、それに加えて主に家庭での余暇の過ごし方やアルバイトなどにも注目すべきことが分かっている。

表1 高校生の職業観形成に関する比較縦断アンケート調査の結果(2009年第1回調査と2011年第2回調査の平均値比較：4件法)

		第1回	第2回	N	t検定
自己実現・生活享受志向	日本	3.03	3.14	223	**
	韓国	3.37	3.33	257	
	中国	3.19	3.14	224	
	インドネシア	3.67	3.72	155	**
	ドイツ	3.1	3.11	48	
	アメリカ	3.39	3.16	111	***
社会・奉仕志向	日本	2.94	3.01	221	
	韓国	3.13	3.11	254	
	中国	3.28	3.12	220	***
	インドネシア	3.63	3.66	149	
	ドイツ	2.91	2.73	48	*
	アメリカ	3.11	2.95	110	**
経済・安定志向	日本	3.33	3.34	224	
	韓国	3.2	3.36	261	**
	中国	3.29	3.25	228	
	インドネシア	3.59	3.56	153	
	ドイツ	3.43	3.26	50	**
	アメリカ	3.35	3.21	111	**
リーダー・富有家志向	日本	2.77	2.81	225	
	韓国	3.04	3.07	261	
	中国	3.14	3.03	227	*
	インドネシア	3.18	3.33	152	***
	ドイツ	2.77	2.79	50	
	アメリカ	3.42	3.37	113	

注1: 対応のあるt検定。0.1%水準***、1%水準**、5%水準*。

注2: 上昇変動は太字、下降変動は斜め字。

注3: Nの数は、反復分散分析の欠損のなかった数である。

3. 子ども・高校生の生活時間研究(Time Budget Survey)

そうすると、生徒の職業観形成や職業・進路選択にとって、彼・彼女らの生活・学習活動全体の中でそれらを観察し分析することが必要なことに気づかされる。前稿(2008年)では、おもに学校でのキャリア学習経験に注目し、各国・各高校の担当教師にインタビューを行ったが、ここでは、生徒自身の生活・学習活動の日常に注目し、生活時間(の使い方)の実態に迫ることとした。いわゆる生徒たちのTimebudgetあるいはTime allocationの中で、職業やキャリアとの関連を見出そうとする調査研究である。

3-1. 生活時間研究一般の方法

生活時間研究一般、とくに社会学的、経済学的視点からのこれまでの研究やその方法に関しては、矢野らの著作(矢野1995)の第1章および第2章で尽くされている。そのような視点からの代表的成果として、ハンガリー人であるA.Szalaiの1966年における呼びかけに始まった国際比較調査の集大成が*The Use of Time*(Szalai1972)である。

そのザライの方式、つまり回答者の生活時間が1日24時間になるようにあらかじめ質問紙に10分刻みの時刻目盛り方式で生活の場所、移動の分類ワードを示し、かつ一次行動(主たる生活活動)とともに二次行動(「ながら行動」やそのとき一緒にいた人の分類ワードをも示したプリコード方式調査(自由記述方式はアフターコード方式)を適用した、本格的調査が原・矢野らが主宰した経済企画庁の調査(経済企画庁1975)である。この調査は18歳以上の男女に対する日記法と面接法を使用し、平日と日曜日に回答者を分けて、国際比較の視点から主として成人の労働時間、家事時間、生理的必要時間、自由時間、マスコミ接触時間、対人接触時間を調査してものである。

それより前、1960年以降、アフターコード方式、面接法を使ったNHK放送文化研究所による全国的調査が5年ごとに、そして1995年以降はプリコード方式で行われている。最新の2010年調査(NHK放送文化研究所2011)は平日、土日の連続2日間の生活時間に関して、層化無作為2段階抽出法により抽出された10歳以上の男女7,200人に対する15分刻みの時刻目盛り日記式調査を行っている。大分類である拘束行動(仕事、学業など)、自由行動(レジャー、マスメディア接触など)、必需行動(睡眠、食事など)の回答結果から、曜日別、男女別、カテゴリー別に、そして15年前との比較がなされている。

上記経済企画庁の調査を政府レベルで継承する形で、総務省が1976年以降5年ごとに、そして2001年以降はプリコード式(A票)とアフターコード式(B票)の2票を使った、10歳以上世帯主および世帯員に対する社会生活基本調査の中で生活時間調査を行っている(総務省統計局2013)。

その他に、学問的な研究成果としては、矢野らの一連の研究に加えて、労働時間・家事労働の視点からの伊藤セツ・天野寛子らの生活福祉的調査研究(2005)もある。

3-2. 生徒の生活時間調査

他方、本稿の課題である高校生を含む子ども・青少年の生活時間、それは多かれ少なかれ彼・彼女らの学

習時間、あるいはそれ以外の生活活動とのバランスに注目した調査・研究も存在する。

比較的大がかりな継続的調査として、1982年から1992年まで5年おきに、それ以降は10年おきに行っているNHK放送文化研究所の中学生・高校生のおもに意識調査の中での学習時間とテレビ視聴やインターネット利用の実態調査(NHK放送文化研究所,2013)、そしてベネッセ教育総合研究所の小・中・高校生の放課後の生活時間調査(2009)がある。前者は学校外の勉強にどれくらいの時間を使っているかを選択式で問う調査である。後者は総務省統計局の社会生活基本調査やNHK放送文化研究所の国民生活時間調査の方法を取り入れた本格的なものである。小学5年生から高校2年生に対して平日(11月10日曜日から11月14日金曜日のうち1日を選んで)平日24時間を15分刻みで問うプリコード式の郵送法・自記式調査である。それによって、子どもの生活行動パターン、時間の過ごし方と時間に対する意識・ストレスを解明しようとしている。時間の「やりくり上手」が育っていないとか、家庭での「段取り」文化が消えてきたこと、時間のコントロールができなくなっていることなど、ある意味でありきたりなネガティブ現象が明らかにされている。

より学術的な調査研究としては、教育社会学分野に若干見られる。学習時間という「努力」の階層差を暗にメリトクラシーと関連づけようとした荻谷の研究(2000)、上記のベネッセの調査を主宰・解説し、「出身階層からやや切り離された形で、自立学習などに代表される子どもの勉強スタイルが、成績向上にポジティブな効果をもたらす」「(親が言わなくても子どもは自分から勉強する)」ことの重要性を指摘した明石要一らの研究(2009)がある。前者は、学習時間を記入させた方法が不明であるが、1979年時点と1997年時点の同一高校の生徒に対して学習時間を「しない」「30分以下」「30-60分」、以下1時間刻み、「4時間以上」で問う比較調査である。それら学習時間を従属変数とする重回帰分析の結果、母親の学歴、高校ランクなどの変数が有意な生の効果を示したという。

しかし、これらはほぼすべて、ひとりの人間に対するある平日か土日の生活の断片だけを切り取って回答を求めるか、学習時間をいくつかのランクを示して選択させるかの調査であり、平日から土日にいたるまでの生活の過ごし方を問うものではなく、ましてや本稿が問題にするように、学業成績とはある意味では対極にあり、より包括的な発達課題である、進路や職業観の形成との関連づけに注目したものではない。また、

逆に、キャリア発達において子ども・高校生の生活時間の質に注目した研究もあまり見られない。例えば、アメリカのキャリア発達に関する専門誌である"Journal of Vocational Behavior" の2009年以降の記事を検索しても"time budget"や"time using"そのものをキーワードとする研究は皆無であった。また、旧日本進路指導学会がキャリア教育学会に名称転換した2005年以降だけをみても、同学会誌である『キャリア教育研究』(年2回刊)の誌面にその類いの研究論文は存在しない。

4. 本調査の課題・方法

4-1. 調査目的・時期・対象

本研究は、日本、ドイツ、韓国の3ヶ国の高校生の生活時間について、ただし、大規模な先行諸調査のように、特定の平日や土日だけのそれを聞くのではなく、最近の1週間のすべての日について記述を求め、よりトータルな週間生活を知り、その中で将来の進路や職業観形成に関わる活動要素を比較教育文化的に抽出しようとするものである。

今回の筆者の生活時間調査は、元々は2009年(第1回)と2011年(第2回)に行った高校生1年生から3年生にかけての職業観形成に関する縦断的国際(6か国)比較研究の一環として、そのアンケート調査参加者に対する個別筆記調査として2011年中に実施することを企画したものである。しかし、それが叶わず、調査は2012年から2013年にかけて、ドイツ(2012年6月)、韓国(2012年7月)、日本(2013年11月)に関してのみ、断続的に行われた(表2)。

大規模の調査ができなかったので、対象は、3か国で協力の得られた高等学校(ドイツはギムナジウム)のいずれも高校3年生(ドイツの場合12年生)男女若干名に対しての事例調査である。当初、各国とも普通高校生と職業系の高校生を対象としていたが、ドイツに関してはフルタイムの職業高校が一般的ではないこともあり日韓両国との比較可能性から、普通ギムナジウム(高校)のみとした。各国普通系、職業系各1校の男女数名ずつの事例調査なので、とても各国高校3年生の全貌を観察できないけれども、それらの断面の抽出を企図した。

表2 記入調査対象校・生徒数

国	学校種	地域・特性	男子	女子
ドイツ	普通ギムナジウム	ハトライン・ヴェストファ -レン州農村部	1人	4人
韓国	私学普通進学校	ソウル市内	5人	
	私学普通進学校	ソウル市内		4人
	公立工業高校	ソウル市内	4人	1人
日本	普通進学校	愛知県内	3人	3人
	工業高校	愛知県内	5人	2人

Wie verbringen Sie Ihre Zeit an einem typischen Wochentag (Montag bis Freitag)?
Und wie am Samstag und am Sonntag?

Bitte füllen Sie den Zeiterfassungsbogen aus und beschreiben Sie, wie Sie Ihre Zeit verbringen. Zum Beispiel:
Aufstehen, Essen, Schulweg, Unterricht, Computerspielen, Hausaufgaben, Nichtstun, Buch lesen, Musik hören etc.
Orientieren Sie sich bezüglich der Art des Ausfüllens an dem Beispiel in der roten Spalte ganz rechts!

Uhrzeit	Wochentage	Spezielle Aktivitäten an manchen Wochentagen	Samstag	Sonntag	Beispiel
6.00					6.00
7.00					Frühstücken zur Schule
8.00					8.00
9.00					Unterricht
10.00					10.00
11.00					11.00
12.00					12.00
13.00					13.00
14.00					Nach Hause Mittagessen Nichtstun Musik hören
15.00					15.00
16.00					Hausaufgaben 16.00
17.00					Speziell Mit Freunden Mittwoch zum Fußball treffen Computer spielen Fußball- training chatten nach Haus
18.00					18.00
19.00					Nichtstun Buch lesen Arbeit in Küche Abendessen
20.00					20.00
21.00					21.00
22.00					22.00
23.00					Computerspielen, chatten, Musik hören
24.00					23-45 Eintraben 24.00

図1. 生活時間記入調査票(ドイツ語版) Zeitbudgetstudie Terada

4-2. 調査の方法・項目

少なくとも日本ではこの種の先行研究を見ることができない中での探索的調査研究であるので、基本的な生活行動のみを例示して、一次行動の抽出に重点を置き、いわば「半プリコード式」調査とした。図1は、最初の調査地点であった、ドイツ・ノルトライン・ヴェストファーレン州のギムナジウム(デュッセルドルフの南西部のオランダ国境に近い町)で使った独語版である。独語版は、デュイスブルグ・エッセン大学東アジア研究所情報技術補佐員であるHaraldKrähe氏とともに作成したものである。和文版はこの際寺田が作成した。この韓国語版は日本語を介して忠南大学校師範大学の李明薫(イー・ミュンフン)准教授が翻訳した。

記入データに関して、あらかじめ用意されたカテゴリーごとに、またそうでない記入項目に関して経も適宜カテゴリーを与え国別、学校種別、男女別に平均分時間と人数(例えば350=4)で集計した。さらに、食事や何もしないくつろぎの時間はさまざまの自由行動(二次行動、三次行動)を伴うことが多く、第1次行動に加えてそれらを抜き書きし、各表の該当欄に記すことにした。

5. 結果：高校生の生活時間の実態

5-1. 日本の普通校生と工業校生

まず、日本の愛知県内の高校生の生活時間(表3)について、平日、週末ごとに、学校種、男女の比較をしてみる。
平日

もっとも目立つことは、やはり進学系普通校の生徒は、男女とも食事などの義務的生活時間や課外活動、さらに自由時間行動を最小限にして、それらを自宅学習や塾の授業(女子1人だけ)に振り向ける。女子の塾授業を含めれば、それらの学習時間は5時間近くになる。

他方、工業校の生徒は男女とも義務的生活時間をゆったり取った上で、テレビ視聴・PCや何もしない時間を数時間使う。男子では、1人だけであるが、課外活動(スポーツ)に取り組む生徒もいる。

週末

平日の傾向は、週末にいつそう強化される。普通校生徒は睡眠、食事などに平日より各1,2時間多く取りつつ、自宅学習と塾での学習に合わせて8から10時間程度を消費する。進学系の普通校生徒では塾に通う生徒はわずかしがなく、ほとんどが自主家庭学習である。また、平日にできない自由行動は週末に一定確保される。男子生徒で勉強の合間に30分ずつ断続的に運動を行う、女子の団欒(夕食とともに)などが目立つ。また平日も一人見られるが、朝食の二次行動として新聞を

読んだりする生徒が複数存在する。

工業校の生徒の場合、平日よりも週末に少しまとまって、2時間前後学習する生徒が複数見られる。また、工業校の男女の多数が、TV・PC・スマートフォンに6時間以上を使い、何もしない(じつは音楽やスマホの二次行動を伴っている)時間を多く持っている。

アルバイト・ボランティア・家事など

家事はほとんどなされていないが、家族との団欒の時間などに多少の後片付け仕事などが行われていると推測される。職業観形成という点で注目したいのが、アルバイト、ボランティアである。工業校女子一人が平日の学校での部活動でボランティア活動に取り組んでいる。アルバイトについては、普通校生徒は皆無であり、工業女子で週間の1日、土曜日、日曜日に各延べ一人数時間行われている。工業校生でアルバイトをする生徒は、今回の調査範囲では意外に少なかった。

5-2. ドイツの普通校生

つぎに、表4からドイツの普通ギムナジウムの生徒、とくに女子生徒の生活時間状況をみてみよう。

平日

ドイツのギムナジウム生の平日の日常生活にとって特徴的なことは、まずは帰宅時間が早くて、13時30分に授業を終えると、だいたい14時ごろか14時30分には帰宅できることである。その後、ドイツ的に簡易な昼食を取る。帰宅後は、多くの時間を学習に費やすことはなく、PC、友達とのディスコ行き、各種のスポーツ(女子4人中3人)などの行動が目立つ。学習もないことはないが、女子で平均3時間程度である。アルバイトに行く生徒も1人いる。因みに、この時期、ノルトライン・ヴェストファーレン州では、大学入学資格試験であるアビトゥア(Abitur)の学科試験(通常4月)、口述試験(通常6月)が終わった段階での調査であることを付記しておく。

特別の曜日

他の2か国と比較して目立つのは、平日月曜日から金曜日まで同じパタンの生活をするのではなく、ひじょうに多様な生活を送る。生徒は、週の1日、あるいは2日、水泳、バトミントンなどのスポーツ、クラリネットの練習、あるいはアルバイトなどを組み込んで時間を活用する。

週末のアルバイト・ボランティア・家事など

週末はじつに自由な時間帯である。1名の男子の場合、日曜日にサーキット練習を休憩、昼食を挟んで10時間、友達との行動に3時間を費やす。女子では、アルバイト、教会でのミサなどが目立つ。

表3 日本の高校3年生の生活時間(平均分時間・行為者数：普通校：男3人、女3人、工業・電子校：男子5人、女子2人)

一次行動	校種・性別	食事・風呂等 義務的(要の) 平日昼食除 下校	学校・授業 授業開始- 下校	学校自 習	課外活 動	塾	自宅学 習	自由時間										家事・アルバイト ホウテテ	就寝	二次・三次行動
								TV・PC等 遊	新聞・読 書	友達	スポーツ	音楽	何もしな い	家族団 練	他					
平日	普通男子	75=3①	435=3	142.5=2	0	0	275=3	30=1	0	0	30=1	30=1	30=1	60=1	0	0	0	405=3	風呂+TV=1,音楽+ゲーム=1	
	普通女子	130=3	415=3	55=3	0	225=1	201.6=3	0	30=1	0	0	0	0	0	0	0	0	360=3	夕食+団練=1,音楽+新聞=1	
	工業男子	111=5	420=4	0	225=1	0	45=2	225=4	0	0	0	60=1	60=1	135=1	0	漫画60=1	0	402=5	TV等の人は5:10分を携帯+映画+教 材	
	工業女子	157.5=2	420=4	45=1			60=1	135=2	0	0	0	0	90=1	90=1	0	0	0	375=2	TV+本+団練+何もしない+PC+音楽	
平日特定日	工業男子																			
	工業女子																			
普通校記述無	工業男子																			
	工業女子																			
土曜日	普通男子	120=3②	0	510=1	0	0	528=3	60=1	30=1	0	120=1	30=1	30=1	60=1	0	30=1	0	474=5	風呂+TV=1,音楽+ゲーム=1	
	普通女子	173.3=3	155=3	37.5=2	0	240=1	255=3	0	60=1	0	0	0	0	0	0	0	0	420=2	夕食+団練=1,音楽+新聞=1,夕食+TV=1	
	工業男子	132=5	0	0	240=1	0	30=1	310=3	0	240=1	160=3	0	0	390=2	0	435=2	0	462=5	TV+手紙+団練=1,TV+団練+携帯=1,平日 は洗濯+外食+何無しの人60分は+音楽98他	
	工業女子	187.5=2	0	0	0	0	180=1	347.5=2	0	0	0	0	60=1	60=1	0	60=1	0	435=2	PC等の人は4:65分を+TV+音楽	
日曜日	普通男子	120=3②	0	570=1	0	0	490=3	45=1	0	180=1③	30=1	0	60=1	60=1	0	30=1	0	480=5	風呂+TV=1,音楽+ゲーム=1	
	普通女子	170=3	0	0	0	510=1	505=3	75=1	30=1	0	60=1	0	60=1	45=2	0	0	0	435=2	夕食+団練=1,朝食+新聞=2,夕食+TV=1	
	工業男子	144=5	0	0	165=1	0	105=2	339=5	0	300=1	195=2	0	510=1	0	0	0	0	480=5	TV等の人は8:10分を+漫画+携帯+何無しの 人510分は+音楽	
	工業女子	147.5=2	0	0	0	0	60=1	180=1	0	0	0	0	240=1	0	150=1	0	0	435=2	何無しの人は+音楽 等+人180分は+PC+音楽	

①男子1名風呂記述無 ②男子1名土・日昼食外出時 ③30分ずつ運動を反復

表4 ドイツ・ギムナジウム12年生の生活時間(平均分時間・行為者数：男1名、女4名)

一次行動	校種・性別	食事・風呂等 義務的(要の)	学校・授業	学校自 習	課外活 動	塾	自宅学 習	自由時間										家事・アルバイト ホウテテ	就寝	二次・三次行動
								TV・PC等 遊	新聞・読 書	友達	スポーツ	音楽	何もしな い	家族団 練	他					
平日	男子	180=1①	330=1	0	0	0	30=1	0	0	0	60=1③	60=1	60=1	0	0	0	0	510=1		
	女子	36.25=4①	330=4	0	0	0	123.8=4	140=3	0	90=2	135=1③	45=1	0	0	0	0	0	458.75=4		
平日特定日	男子																			
	女子		水490=1				120				150=2	90=1								
土曜日	男子	80=1,朝不明	0	0	0	0	0	0	0	90=1	0	0	0	0	0	0	0	600=1	他不定は朝は+読書+TV+学習	
	女子	85=4	0	0	0	0	30=1	0	0	180=1	0	0	300=2	0	0	0	0	623.75=4	友達180分+団練	
日曜日	男子	60=1	0	0	0	0	0	0	0	600=1	0	0	180=1	0	0	0	0	420=1	スポーツはサッカー、何無は+友達+TV	
	女子	153.75=4	0	0	0	0	0	60=2	0	180=2	0	105=2	0	0	0	0	0	570=2②	他不定420分は+バイト+特別+学習+バイト	

①昼食は平日全員帰宅後 ②授業は8:00-13:30 ③男子+女子+女子

表 5 韓国の高校 3 年生の生活時間 (平均分時間・行役者数) : 普通男子校 5 名, 普通女子校 4 名, 工業校男子 4 名, 工業校女子 1 名)

一次行動	校種・性別	食事・風呂 等義務的 平日昼食 費除	授業* 平日昼食	学校自 習	課外活 動	塾	自宅学 習	自由時間										就寝	二次・三次行動	
								TV・PC 鑑	新聞・読 書	友達 遊	スポーツ	音楽	何もしな い	家族団 結	他	家事・アルバイト ボランティア				
平日	普通男子校	96=5①	510=5	300=2	60=1	0	285=3	60=1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	444=5	
	普通女子校	11625=4①	540=4	270=4	0	0	60=2	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	412.5=4	
	工業校男子	95=4	480=4	0	0	0	0	266.25=4	60=1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	570=4	
	工業校女子	90=1	480=1	0	0	0	225	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	465=1	自宅学習+休憩,他は散歩
平日特定日	普通男子校					150=2														
	工業女子校					220=3														
	工業校男子					330=1														金曜夜ハク
土曜日	普通男子校	126=5(各夕 食不明除)②	240=1	240=1	0	270=4	371.25=4	165=2	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	555=5	
	普通女子校	135=4(昼夕 食1名不明 昼食除)③	560=3	0	0	0	335=2	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	585=4	
	工業校男子	176.25=4(7人 昼食除)③	0	0	0	0	281.25=4	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	536.25=4	
	工業校女子	270=1	0	0	0	0	360=1	60=1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	660=1	PC360は+読書,他180は+読書,読書は+散歩
日曜日	普通男子校	138=6(昼夕 食1名不明 夕食除)②	0	0	0	290=3	352.5=4	165=3	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	597=5	他休憩の一人30分は散歩
	普通女子校	165=4(夕1人 不明除)	310=3	0	0	225=2	330=2	140=3	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	585=4	
	工業校男子	131.25(昼夕 不明除)	0	0	0	0	345=4	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	577.5=4	
	工業校女子	270=1	0	0	0	0	540=1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	570=1	TV,昼+団練

①夕食男子2人普通女子全員学校で ②普通男子3名昼食学校で ③工業男子全員夕食自宅

5-3. 韓国の普通校生と工業校生

韓国の場合、日本以上に普通校と工業校の生徒とでは、大きな違いが観察される。日本と同様、男女間にはそれほど大きな違いは見られない(表 5)。

平日

普通校男子により特徴的であるけれども、食事等の義務的時間(自由時間の中の休憩もカウント)が切り詰められ、自宅学習(約 5 時間)、加えて、課外の学校での補習授業が約 4 時間も使われる。したがって、過半の生徒は夕食も学校の食堂で済ませることになる。自由時間は全くといってよいほど存在しない。

他方、工業校の生徒は、男子では家庭学習は全くしない上に、TV・PC に多くの時間(約 5 時間も)割いている。

特別の曜日

普通校の男女ともほぼ半数の生徒、また工業校の男子 1 人は、週のうち 1 回か 2 回、数学や英語の塾に通い、大学受験に備える。工業校男子が塾に通うのは日本ではあまり一般的ではないが、韓国では大半の工業校卒者が専門大学に進学するので、珍しいことではない。

週末の塾通い・アルバイト

週末の時間の使い方は普通校と工業校では、両極に分かれる。普通校の男女とも、平日より 2 時間以上多く、家庭学習に費やす。また、彼・彼女らは土曜日、日曜日にたっぷりと(4 時間前後)塾通いする。

他方、工業校の生徒は、アルバイトをするわけではないが、TV・PC に約 5 時間(男子の日曜日)から約 9 時間(1 人の女子)も消費する。しかし、普通校では見られないけれども、工業校男子 1 人の(土曜日に 8 時間)、同女子 1 人(日曜日 3 時間)の教会活動が特徴的である。

6. 生活時間調査の比較と考察

6-1. 学校種別比較

比較分析という点では、国の差異よりも学区種による差異がひじょうに顕著であった。つまり、日本と韓国の 2 か国の範囲であるが、普通高校生と職業(今回は工業高校)生との間に大きな差異が見られた。逆に言うと、日韓両国の教育文化的環境・歴史の共通度が高いということになる。

日韓両国の普通高校生、今回はいずれも進学校であったが、そういう学校の生徒は、平日、週末(はそれ以上に)とも、自宅ないし、塾での受験準備学習に生活時間のほぼすべてを費やしている。韓国は日本以上にその傾向が強い。そのことは夕食を取る場所、また受験生を支えるシステムが異なる。わが国の進学志向の高校生は、平日には帰宅後若干勉強をし、急ぎ夕食をテレビなどを見ながら取り、また勉強する。韓国の普通校生は学校に残り、補習授業が深夜近くまで塾で学習する。

これらには、日韓両国の教育文化的環境の共通性、つまり高学歴志向の社会、有名大学志向が大卒後のキャリアに関わってくる社会のありかたが作用していると言える。今回の調査対象の愛知県の普通校生にはインタビューできなかったが、それを行った韓国ソウルの当該進学校の生徒たち(今回の記入調査とは別の生徒数名)が卒業後の明確な進路希望・希望職業を有していたことが印象的である。

6-2. 国別比較

この点では、やはり日韓両国とドイツの間では、同じ普通校生徒の場合でも、大きな違いが見られた。今回、試験前の時期であるかどうかということに限定せず、一般的に通常の時期の平日、特別の日、週末という区切りで記入を求めた調査であったにもかかわらず、ドイツの最終学年生は学校の外、家庭では、もちろん塾などは存在しないのであるが、あまり自主学習をすることはない。帰宅後昼食を取り、ゆったりと多様な生活をする。この点は、日韓両国の工業高校生に近いといえる。しかし、日韓の工業高校生ほど、TVやPC、携帯電話・スマートフォンに首っ引きというほどでもない。アルバイト、スポーツ、音楽、教会活動など比較的多様である。

このような日韓両国とドイツの事例校の生徒間の生活時間の使い方の差異は、ドイツでは両国ほどの高学歴志向、特定銘柄大学志向は存在しないこと、またなんとと言っても大学入学資格試験はあっても大学入学試験制度が存在しないこと、さらにギムナジウム生徒の進路が伝統型一般大学だけでなく、実践的高等職業教育を行う専門大学や、中にはデュアルシステムに入る者が多くいるなど、多様なキャリア、価値観が見られることに起因すると言える。

なお、今回の調査では、男女の差異より、その共通性の方が高かった。敢えて言えば、女子の場合、週末を中心に家事手伝いをしたり、家族との団欒の時間を持つ生徒が若干見られることが特徴的であった。

6-3. 生活時間の使い方と職業観形成との関連づけ

韓国の生徒のアルバイト・ボランティア活動と経済安定志向

どの国も、平日にアルバイトをする生徒は少なかった。しかし、韓国の工業校生の1人が金曜日夜からの徹夜アルバイトをしたり、ドイツや日本の工業校生で、平日特定日に数時間のアルバイトをする者が見られる。また、韓国やドイツの一部の生徒が、週末教会のミサに通ったり、長時間の教会活動に参加したりしている。そのうち、今回の生活時間調査に参加した韓国の生徒は2回の職業観調査に参加した生徒でもある。2のところ韓国での生徒の職業観形成における変化(上述の2で韓国の生徒の経済・安定志向が2年間の間に有意に増加したことを示した(表1)が、そのことに対して今回の生活時間記録に見られるようなアルバイト経験やボランティア活動経験の有無が一定の作用をしていると考えられる。

日韓普通校生の学習中心の生活と自己実現志向

日本とドイツの生活時間調査への参加者は、2回の職業観調査に参加していないので、生活行動と職業観形成の特質を直接関連づけることはできない。しかし、職業観形成の変化において、日本の生徒の場合で目立ったことは、自己実現志向の増大(表1)は普通校の受験勉強中心の生活(普通校生)や何もしない(何をしているかははっきりしない)時間を含む自由時間中心の生活(工業校生)が作用していることを推測させる。

ドイツの生徒の自由時間中心のゆったり生活と社会・奉仕志向

また、ドイツの生徒に見られる自由時間中心の生活は、多様で豊かな人間形成に資するものと考えられるけれども、それは必ずしも社会奉仕志向や経済・安定志向の向上につながっていない可能性が考えられる。

7. まとめ(生活時間調査の今後の課題を含めて)

生活時間記入調査及びその結果に関して、今後の課題を中心に要点を纏めておく。

まず、高校3年生の生活時間においては、国別にみれば、日韓両国とドイツの間では大きな違いが見られた。朝8時30分ごろから16時ごろまでの授業を受ける日韓の生徒、13:30には帰宅するドイツの生徒との違いである。とくにドイツの生徒はじつにゆったりとした多様な行動ができる。対して、とくに日韓の普通校生は週末を含め、勉強オンリーの生活である。

他方、日韓の工業校生とドイツの普通校生は類似性が強く、アルバイト、ボランティア、課外活動、自由

時間などと多様である。しかし、日韓の工業校生の場合、「何もしない」時間やテレビ視聴・パソコン類の遊びなどの時間が特段に長く、この点ではドイツの普通校生が様々な活動に分散しているのと多少異なる。

職業観との関連では、韓国の生徒のそのような生活様式が経済・安定志向の向上や逆に社会・奉志向の低下の一因であることが究明できた。

調査技術上の問題として、まず、調査用紙への記入事項に関して、いわゆる「ながら行動」(第二次行動、第三次行動)や「・・・か・・・」という不特定行動が多く見られた。前者に関しては調査用紙に明確にながら行動を記すようにすること、後者に関しては1週間全部の生活を「普段の生活」として問うことの限界であるかも知れない。今後の改善を期したい。

<参考文献> (50音順)

明石要一・岡部悟志・木村治生他(2009) 子どもの24時間の過ごし方と時間に関する意識—「放課後の生活時間調査」(2008年)の結果から—, 第61回日本教育社会学会大会発表資料.

伊藤セツ・天野寛子他(2005) 生活時間と生活福祉, 光世館.

NHK放送文化研究所(2011) 日本人の生活時間2010 NHK出版, 「調査の概要」(179-187)参照.

NHK放送文化研究所(2013) NHK中学生・高校生の生活と意識調査.

経済企画庁国民生活局国民生活課(1975) 生活時間の構造分析 時間の使われ方と生活の質, 大蔵省印刷局, 第2版(1978)参照.

Szalai, A. (ed.) *The Use of Time*, Mouton, 1972.

総務省統計局(2013) 平成23年度社会生活基本調査, <http://www.stat.go.jp/data/shakai/2011/2013/11/22>.

谷村賢治(1994) 生活時間から見た現代家庭生活 1: 生活時間配分と家族の触れあい, 長崎大学教育学部社会科学論叢, 48, 1-18.

寺田盛紀(2009a) 職業観形成の比較教育文化的研究(1)—日・中・韓・印ネの高校3年生の進路形成と職業希望の様態— 名古屋大学大学院教育発達科学研究科紀要(教育科学) 第56巻第1号(2009.9), 1-18.

TERADA, Moriki(2009b) Comparative Education-Cultural Research on the Formation of Vocational Views and Values as a Challenge of Vocational Education; Analyses of Vocational Aspirations and Vocational Values for 12th Grade Students in Japan,

Korea, and Indonesia. *Journal of Asian Vocational Education and Training*, Vol.2, No.1, 49-61.

寺田盛紀・紺田広明・清水和秋(2012) 高校生の職業観形成とその要因に関する比較教育文化的研究—6か国における第10年生に対するアンケート調査結果の分析から— キャリア教育研究(日本キャリア教育学会) 31(2012.9), 1-13.

寺田盛紀・清水和秋・山本理恵(2013a) 6か国における高校生の職業観とキャリア経験の変化に関する縦断的研究—高校生の職業観形成に関する比較教育文化的研究(3) 生涯学習・キャリア教育研究第9号(2013.3), 51-65.

寺田盛紀・清水和秋・山本理恵(2013b) 6か国における高校生の職業観とキャリア経験の変化に関する縦断的研究—高校生の職業観形成に関する比較教育文化的研究(4) 名古屋大学大学院教育発達科学研究科紀要 第60巻第1号(2013.9), 129-145.

藤原真砂(2001) 生活時間研究における「平均時間」再考 総合政策論叢(島根県立大学総合政策学会).

ベネッセ教育総合研究所(2009) 放課後の生活時間調査, <http://berd.benesse.jp/berd/center/open/report/houkago/2009/hon/>, 2013/11/20.

矢野真和(1995) 生活時間の社会学-社会の時間・個人の時間, 東京大学出版会, 第2刷 1996参照.

追記:なお、本稿は、カシオ科学振興財団の第30回(平成24年度)の研究助成に採用された課題「高校生の進路選択・職業観形成と効果的教育・生活活動に関する縦断的研究—欧米・アジア5か国との比較—」に基づく調査研究であることを付記する。

* 名古屋大学大学院教育発達科学研究科教授

** 韓国・忠南大学校師範大学副教授

*** ドイツ・デュースブルグエッセン大学東アジア研究所技術補佐員

Comparative Study on Some Functions of Education-Life Activities to the Formation of Vocational Views and Values for High School Students : Case Surveys on Time Budget of 12th Grade's Students in Japan, Germany and the South Korea.

Moriki Terada (Professor of Graduate School and Human Development, Nagoya University, Japan)

Myung-Hun Lee (Associate Professor of College of Education, Chungnam National University, South Korea)

Harald Krähe (Part time assistant of Institute of East Asian Studies, Duisburg-Essen University, Germany)

Abstract

This study aims to clarify the role of some life activities of high school students upon the development of vocational views and values through comparative panel questionnaire surveys in 2009 and 2011, and some interview surveys in Japan, Korea and Germany. Especially, this paper focuses on analyses of time budget surveys by the descriptive semi-code style to some 12th grade high school students, 13 students in Japan, 14 in Korea and 5 in Germany. Number of proportion in the sex and the kind of school (general or vocational) of survey attendants are considered excluding Germany which objectifies only general (*Gymnasium*) students.

As the results of analyses, we can point out some characteristics and findings.

First, from the comparison among three countries, especially in the cases of general students, there is big difference between Japan- Korea and Germany. In Japan and Korea, students use too many hours to their learning in private home or "*Juku*". Contrastively, German students live so flexible and varied activities.

Second, from the comparison between kinds of school type, vocational students, German general students are like to them, concentrate in free media plays, but they reach in so various kind of activities such as part-time work, volunteer activity, school extra activity etc.

Thirdly, as most important issue in this study, we can confirm the cause and result relationship through the relative analysis of results of two times questionnaire and results of time budget survey in this time. Especially, the living style of Korean students seems to influence on the development of the factor "economy-stable living orientation" and on the reduction of the factor "society- service orientation" between 2009 and 2011.